

仙台市文化観光局観光交流部観光課 御中

奥新川・新川エリア事業可能性調査に関する業務委託

調査報告書

目次

P2	1. 本調査の背景と目的
P3	2. 本調査の内容・実施スケジュール
P4～12	3. 調査結果：事前調査
P13～22	3. 調査結果：実地調査・ヒアリング調査
P23～25	4. コンテンツの可能性
P26	5. 総括・体制の可能性
P27	6. 次年度以降のビジョン

1. 本調査の背景と目的

■本調査の背景

奥新川ライン・新川ラインは、奥羽山脈のほぼ中央に位置する県立二口自然公園にあり、周辺には約1,200種の植物が群生している。JR仙山線奥新川駅付近の溪谷から新川の下流方面の全長4.8kmの遊歩道を新川ライン、ここより上流にあたる面白山方面に伸びる溪谷沿いの全長6.0kmの遊歩道を奥新川ラインと呼び、山深い自然の溪谷美に溢れる景勝地である。特に新川ラインは、新・奥の細道の一つであり、宮城県の長距離遊歩道の一つである。なお、奥新川ライン・新川ライン共に、吊り橋の老朽化や落石等が発生しているため、令和2年12月以降廃止している。当該エリアには、市営のキャンプ場が設置され、ハイキングや芋煮会、紅葉狩り等で賑わっていたが、利用者の減少や施設の老朽化により平成29年に廃止、現在はせんにん広場・たそがれ広場が整備されている。

新川ラインの下流には、ニッカウキスキー宮城峡蒸溜所が立地し、蔵王連峰を経て流れてくる新川の清らかな伏流水は、日本各地の蒸溜所が使っている水の中でも硬度（公表値）が低くウイスキー作りに適していることから、ニッカウキスキーの仕込み水として使用されている。また風光明媚な鳳鳴四十八滝があり、ハイキング客で賑わう鎌倉山を背景に階段状の滝が流れる様は美しく、本市の緑100選に選ばれている景勝地である。

JR仙山線近隣は、かつて栄えた秋保鉱山に勤める人々で賑わい、土木学会の選奨土木遺産仙山線鉄道施設群として指定されている奥新川直流変電所跡や回轉變流機資料館、作並駅転車台、新川川橋梁等から、かつての姿をしのぶことができる。

また奥新川・新川の近辺には、年間約24万人が宿泊する仙台を代表する温泉地である作並温泉が所在する。

その他、奥新川・新川及びその近辺エリアでは、人口減少に起因する、作並小学校新川分校（閉校）や、廃業した温泉旅館、空き家などがあり、これらを観光資源として活用することも検討課題の一つである。

■本調査の目的

奥新川・新川及びその近辺エリアの観光資源を活用する可能性を探るため、地域活性化に繋がる事業案の具現化、必要概算費用額の算出、収支予測等を実施し、地域と連携し当該エリアに賑わいを創出する持続可能な事業実施の可能性を調査する。

2. 本調査の内容・実施スケジュール

■事前調査

奥新川・新川及びその近辺エリアを12のスポットやコンテンツに分け、観光資源としての特徴と課題を可視化。活用方法の「仮説」を立てた。

■ヒアリング調査

NPO法人作並・新川地区活性化連絡協議会、作並振興協会、作並温泉旅館組合、ニッカウキスキー宮城峡蒸溜所（ニッカディスティラリーサービス株式会社）、奥新川自然振興会の5団体に「奥新川・新川及びその近辺エリアの現状をどのように見ているのか」「奥新川・新川及びその近辺エリアが今後どのようになってほしいか」という観点で質問をし、回答を得た。

■実地調査

奥新川・新川及びその近辺エリアを実際に訪れ、「仮説」の実現可能性を確認。そのうち、1回目は「株式会社インアウトバウンド仙台・松島」代表取締役の西谷雷佐さんと奥新川エリアを中心に実地調査を行った。2回目は仙台市文化観光局観光交流部観光課と奥新川エリアを中心に実地調査を行った。また、近辺エリアを訪れ、事前調査12点について追跡調査を実施した。

8月1日（火）～4日（金）	事前調査
8月8日（火）	JR東北本社と意見交換
9月9日（土）	実地調査（奥新川エリア）
9月15日（金）	実地調査（奥新川エリア）
9月22日（金）	ヒアリング調査（新川地区活性化連絡協議会・作並振興協会）
10月24日（火）	実地調査（近辺エリア）
11月9日（木）	ヒアリング調査（作並温泉旅館組合）
11月15日（水）	実地調査（近辺エリア）
11月24日（金）	ヒアリング調査（ニッカウキスキー宮城峡蒸溜所合）
12月4日（月）	ヒアリング調査（奥新川自然振興会）

3. 調査結果：事前調査

①奥新川・新川ライン周辺エリア

澄んだ水と広葉樹林帯が広がり、新緑・紅葉・雪景色と四季折々の美しさを見せる。仙山線をのぞむ絶景ポイントは、中井精也氏など著名カメラマンも訪れる人気スポット。奥新川直流変電所跡や回転変流機資料館、新川川橋梁等は、鉄道ファンを取り込む可能性を秘めている。

＜課題＞吊り橋の老朽化や落石等が発生し、令和2年12月以降通行止め。また、市営のキャンプ場が設置されていたが、利用者の減少や施設の老朽化により平成29年に廃止された。利用者を呼び戻すには、安全にアクティビティを楽しむためのハード整備とともに、整備された後の活用を促進するソフト（観光コンテンツや運営する人材等）が必要である。



②作並駅・転車台跡

仙山線は当初、宮城県側の「仙山東線」と山形県側の「仙山西線」に分かれており、作並駅は仙山東線の終端駅として1931年に新設され、蒸気機関車の方向転換のための転車台が設けられた。1937年に全線開通。作並－山寺間は東北で初めて直流電化され、電気機関車が走行した。一方、仙台－作並間は交流電化の試験地として指定され、1957年作並駅は日本初の交流電化営業運転を開始した。これらの実績から、世界に誇る鉄道遺産として、2014年に土木学会推奨土木遺産に認定され、現在も作並駅感謝祭で特別列車が停車した際は、多くの「撮り鉄」で賑わう。

＜課題＞作並駅校舎は木のぬくもり溢れる美しい造りでお土産が買える小さな売店と休憩スペース、近隣には和菓子屋があるが、それ以外に滞在できる場所が無い。温泉旅館とニッカウキスキー工場は送迎バスが運行するものの、それ以外のスポットへ行く手段が不足している（トレッキングを目的としない限り徒歩移動は難しい）。転車台は仙山線の線路を跨がないと行けず、イベント時等を除いて原則見学できない。



3. 調査結果：事前調査

③鎌倉山（ゴリラ山）

標高520mのお椀を逆さにしたような形をしたこの山は、見る角度によってゴリラの横顔に見えることから「ゴリラ山」と呼ばれ、親しまれており、新緑、紅葉、雪景色と四季折々の表情を見せる。鎌倉山の中腹にある天沼は、後三年の役の際に鎌倉権五郎景政という武将が矢傷を負った右目を洗ったという伝説が語り継がれている。山頂からは作並・新川地域を一望できる。春先にニリンソウの群生が美しく、宮城西市民センターがツアーを開催している。

＜課題＞以前、地域の方々が正式な登山ルートを対外的に示そうと調査を行ったところ、ルート上の地権者が不明な部分があり頓挫してしまった。登山道入り口に行く途中に、遮断機のない踏切があり危険。登山を楽しんでいただくにあたっては、登山者の安全管理、自然保護、草刈り等コースのメンテナンスが必要であり、それを行う人材が不足している。



④鳳鳴四十八滝

広瀬川の本流と西南から流れる新川との合流付近に大小さまざまな滝があり、それらの滝が奏でる水音が伝説の鳥・鳳凰の鳴き声に似ていることから、このような名前と呼ばれるようになった。木々の間をいくつもの滝が階段状に流れ、その背後には「鎌倉山」がそびえ立つ。その姿はまるで自然が描く一幅の絵画のよう。春夏秋冬、季節によってまた違った顔を見せるのも面白い。

＜課題＞展望台から全景を望める反面、秋保大滝のように間近で滝を楽しむことができない。また、展望台以外のコンテンツがなく滞在時間が短くなってしまう。冬場は展望台に隣接する駐車場が積雪で利用できないこともある。近くに美味しい蕎麦を提供する店があり、休日はもちろん平日も人気だが、店内で鳳鳴四十八滝に関連する情報が無く、連携が図られれば飲食客を展望台に送り出すこともできるのではないかと感じる。



3. 調査結果：事前調査

⑤ニッカウヰスキー宮城峡蒸溜所

レンガ造りの建物が渓谷の中に佇む様子が非常に美しい、ニッカウヰスキーの原酒工場。広瀬川と新川の二つの清流に囲まれ、深い森林から生まれる湿潤で澄んだ空気が貯蔵庫の樽を乾燥から守り、豊かな香りを封じ込める。「シングルモルト宮城峡」や「スーパーニッカ」などの製品で使用されているモルトウヰスキーやグレーンウヰスキーを製造している。ガイド付き無料見学の他、有料・予約制の様々なイベント、グッズやウヰスキーなどの買い物が楽しめる。

＜課題＞作並温泉に並ぶこの地域の強力な観光スポットであり、ジャパニーズウヰスキーの隆盛も相まって、工場見学やショッピングで集客力がある。強力だからこそ蒸溜所で完結してしまう印象もある。地域のイベント等とより連携が図られれば、蒸溜所のみならず地域一帯の賑わい創出に繋がる可能性を感じる。



⑥岩谷堂穴薬師

木々に囲まれた参道を登ると、岩壁に洞窟が彫られ、木彫りの東方薬師瑠璃光如来が祀られている。そこに立つと、不思議でスピリチュアルな空気に包まれる。「姪を愛した叔父が結婚の許しを得るために岩壁に洞窟を掘り、晴れて夫婦となったもののその妻を亡くし、難産で死ぬことなれ」と思いを込めて完成させた」という物語が伝えられている。

＜課題＞参道の入口が大変わかりにくい場所にある。駐車場も無いため、車で行くと駐車場所に困る。麓から洞窟までの参道があまり整備されておらず、足元は滑りやすく、歩行が困難なほど。但し、その辿りにくさが他に類を見ないスピリチュアルな雰囲気演出しているところもあり、手つかずの魅力と安全面のバランスの両立が課題である。



3. 調査結果：事前調査

⑦湯のまち作並観光交流館ラサント

地域の魅力発信と山形との交流の拠点というコンセプトで、作並・定義地区観光案内所、地元農家の野菜やおみやげ品の販売スペース、源泉かけ流しの足湯（無料）、アルペロカフェがある。足湯の近くの「恋のお湯かけ地蔵」は、温泉水をかけ恋愛祈願するとご利益があると言われている（湯神社と旅館にも設置）。休日には仙山交流市（マルシェ）等地域のイベントが定期的に行われる。

＜課題＞休日のイベントの際は観光客で賑わう一方、平日は閑散としている印象を受ける。地場産品販売の横にはオープンスペースがあるが、地域の方の集まりがある他は有効に使われていないようである。観光拠点としてだけでなく、地域住民の交流の場所として恒常的に使用されれば、より賑わいのある施設運営が可能になる。



⑧作並こけし

作並温泉で江戸末期から約150年作り継がれる「作並こけし」。平賀こけし店は、作並温泉で唯一残っている工房である。店内には胴が細く、カニ菊という模様が特徴の伝統的な作並こけしから、現代的で若者にも好まれる可愛いデザインの新こけしまで、様々な作品が並んでいる。作並こけしの販売はもちろん、工人の製作風景の見学や絵付け体験も行っており、こけしの魅力をより深く知ることができる。

＜課題＞こけしブームやインバウンド需要を受け、作並こけしもニーズが高まっており、唯一の工人である平賀輝幸は製作に多忙のご様子だが、お母様とともにお店での接客はとても温かい。この作並こけしを更に観光展開させるため、工人でなくても作並こけしの魅力を伝えられる人的サポートがあれば、様々なシーンで作並こけしとのコラボレーションが図られる（例えば、平賀さん以外の方が絵付け教室を行う等）。



3. 調査結果：事前調査

⑨作並温泉

古くから仙台の奥座敷として称された作並温泉。その由来は歴代仙台藩主のかくし湯と伝えられる。1796年の開湯以来、様々な文化人を始め多くの人々が訪れ今なお愛され続けられている。肌にやさしい泉質と豊富なお湯から「美女づくりの湯」とも言われている。現在、宿泊もできる旅館は、「ゆづくしSalon 一の坊」「元湯 鷹泉閣・岩松旅館」「湯の原ホテル」「La楽リゾートホテル green green」の4館のみ。

＜課題＞4つの旅館がそれぞれ個性があり、客室の開発やカフェの併設等、新たな取り組みも数々見られる。一方で「温泉街」と言えるような一体的なプロモーションは見えにくい。その理由としては、「旅館の間に国道48号線があり交通量も多く歩きにくい」「旅館付近に巡れるスポットが少なく旅館の外に出る動機が希薄」「営業を終了した旅館等の空き家が残る雰囲気が良くない」といった課題がある。



⑩新川分校

2020年3月に閉校した作並小学校新川分校跡施設は、現在図書室や体育館を限定的に開放している他、グラウンドをキャンプ場として活用できないか実証実験も含め検討が進んでいる。校舎内には、キャンプ用品やマウンテンバイクを数多く有している。

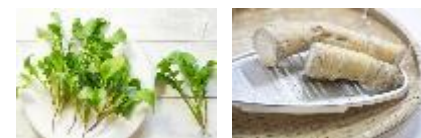
＜課題＞令和4年度にキャンプ活用の実証実験が行われ、ファミリーキャンプの活用可能性を見いだせたものの、地域住民による運営は単発イベントとしても難しい様子。実際にキャンプ場として活用するためには、外部のサポーターが必要。また、キャンプ事業がストップしているため、状態の良いキャンプ用品が放置状態にあるのはとても勿体ない。キャンプに囚われず、それ以外の新川分校の活用方法も並行して考えるべき。



3. 調査結果：事前調査

⑪新しい野菜栽培・武者大根

新川地域では、地域の綺麗な水を活かした「ルッコラ」や「西洋ワサビ」等の野菜の栽培にチャレンジしている。この他、深水栽培という新技術を活用してつくられた「新川清流ホタル米」や他地域ではへそ大根と呼ばれる「武者大根」は、地域固有の農産物・農産加工品と言える。



＜課題＞この地域で作られたルッコラは、温泉旅館やアルペロカフェで採用される等好事例もある。基本的には大量生産では無いので、戦略的なブランディングで価値を高められれば観光促進や地域活性に繋がる。また農家の高齢化や減少は年々加速しており、武者大根は製造をやめようとしている。新規プレイヤーの受入れが求められる。



⑫SAKUNAMI NIKKAWA WALK

作並の美しい自然、受け継がれる歴史・伝説・文化に触れるウォーキングコースを整備し、作並駅に看板を掲げた他、主要10スポットに立て看板を設置し、3種類「水の恵みの路」「先人の歩みを学ぶ路」「美を求める路」のウォーキングマップを印刷した。

＜課題＞ウォーキングコースの整備、マップと看板の作成により、点であった各スポットが面で捉えられるようになった。マップは多くの方が手に取り、増刷している。課題はもちろん、この整備したウォーキングマップの活用である。観光客が来てマップを手に取り、自由に散策するだけでなく、地域の方が主体のガイドツアーができるような体制を整えたい。また、コースの中に奥新川エリアが入っていないので、新たに制作できれば奥新川も一体的に表現することができる。



3. 調査結果：事前調査

小括（事前調査）

奥新川・新川エリアと近辺エリアの地域資源との連携を図る上で重要なのは、各資源を「点」で見せるのではなく、「面」で見せることである。資源を地域一体的に見せるとともに、資源を掛け合わせたコンテンツを創出することが望まれる。前者については、「SAKUNAMI NIKKAWA WALK」が好事例であり、同デザインで奥新川編としてコースやマップ、看板を整備することで、一貫性のある表現ができる。後者については、奥新川をフィールドとしたアクティビティに地域の資源であるヒト・コト・モノを掛け合わせるのが最も考えやすい。ヒトというのはもちろん地域住民のこと。作並・新川地区活性化連絡協議会や奥新川自然振興会をはじめ、シビックプライドの高い住民が多いのがこの地域の強みであるため、奥新川・新川エリアの活性化においても主体的な役割を期待したい。コトというのは観光体験のこと。自然や食や温泉を満喫する、その感動や喜びを奥新川でのアクティビティにも反映させたい。モノというのは、例えばニッカウキスキー、作並こけし、地域の農作物というのが分かりやすいところである。

地域資源の反面、課題も多く山積している。一つはハード面。各スポットを利用者が安心して楽しむためには、安全管理、自然のメンテナンス、アクセスの整備（その場所に行くまでのアクセスと着いた先での道路の整備等）が不可欠である。もう一つはマンパワー。地域住民の少子高齢化が加速しており、どれだけシビックプライドが高くても、恒久的に運営していけるマンパワーを求めるのは難しい。地域外のプレーヤーを入れながら連携して体制を構築することが現実的である。

今回の調査に当たっては、奥新川地域をメインのフィールドに据え、近辺エリアの資源と掛け合わせたアクティビティを「仮説」として設計した。課題であるハードとマンパワーの点も考慮しながら、「このような活用方法であれば実施でき、且つ地域に資するのではないか」という仮説を4つ立て、これをもとに实地調査とヒアリング調査を行った。



仮説1：キャンプ・BBQ

仮説2：アドベンチャートラベル

仮説3：森の図書館（チェアリング）

仮説4：ランチ

3. 調査結果：事前調査

仮説1：キャンプ・BBQ

令和4年度に新川分校でキャンプの実証実験が行われたが、自然環境と状態の良いキャンプ用品があるという利点を有し、特に豊かな森と美しい川がある奥新川地域は、キャンプやBBQのようなアウトドアのフィールドに適していると考えられる。コロナ以降、アウトドアのニーズが高まる中で、キャンプ場は飽和状態にあることから、新たなキャンプスペースを作ることによって送客可能性は十分にある。但し、他キャンプ場との差別化を図るハードまたはソフトの工夫は必要である。様々な設備が整う快適なキャンプ場を作るハード整備はコストの面でも容易ではないだろうから、例えばアウトドアの不便さを楽しみたいニーズを捉え、快適さより非日常を満喫できるありのままの自然を提供するのはどうだろうか。ソフト面では、新川分校での実証実験を参考に、地元農家が作った地元野菜によるBBQや川遊びを中心としたデイキャンプが良いのではないかと考える。



仮説2：アドベンチャートラベル

ポストコロナの観光復興に向け注目が高まったのが、世界的に急拡大しているアドベンチャーツーリズム。自然・アクティビティ・異文化の内、2つ以上で構成するもので、サステイナビリティが重要視される現代に合致。様々なアクティビティの中でも、奥新川エリアでは、美しい新川を体感できるリバートレッキングがエリアの強みを最大限に発揮できるのではないだろうか。川を歩くことは、自ずと森を歩くことになり、環境や生態系を学ぶ機会にもなるため、遊びと学びが両立する。奥新川ライン・新川ラインが通行止めとなっている今、リバートレッキングのコースを整備することは、奥新川の新たな道を開拓することに繋がる。リバートレッキングの他に考えられるのは、森を散策するトレッキングとファットバイクである。この二つは、JR奥新川駅から作並温泉までをつなぐアクティビティとして機能する可能性がある。いずれにしても、アドベンチャートラベルは、専門のインストラクターが必要であり、地域外のプレーヤーと地域住民の連携体制を構築することが大切である。



3. 調査結果：事前調査

仮説3：森の図書館（チェアリング）

前述のアドベンチャートラベルに対し、非常に簡単なアクティビティが「チェアリング」である。チェアリングとは、折り畳み式のチェアを片手に出掛け、自分の好きな場所で腰を下ろし、読書や食事等を楽しむもの。奥新川の森の中、或いは川に足をつけながら、といったシーンが想像できる。実施イメージとしては、JR奥新川駅で折り畳み式のイスと本を貸し出し。参加者は好きな本を手に取り、自分の好きな場所を見つけて、森を抜ける風の音や川のせせらぎをBGMに読書にふける。賑やかではないが、満ちる空間を創出する。この場合、JR奥新川駅の活用についてJR東日本の協力が必須となる。また、チェアリングの場所については、参加者に自由に決めてもらうのが原則なため、安全性を考慮し、チェアリング可能なエリアを予め示すことも必要だと考えられる。

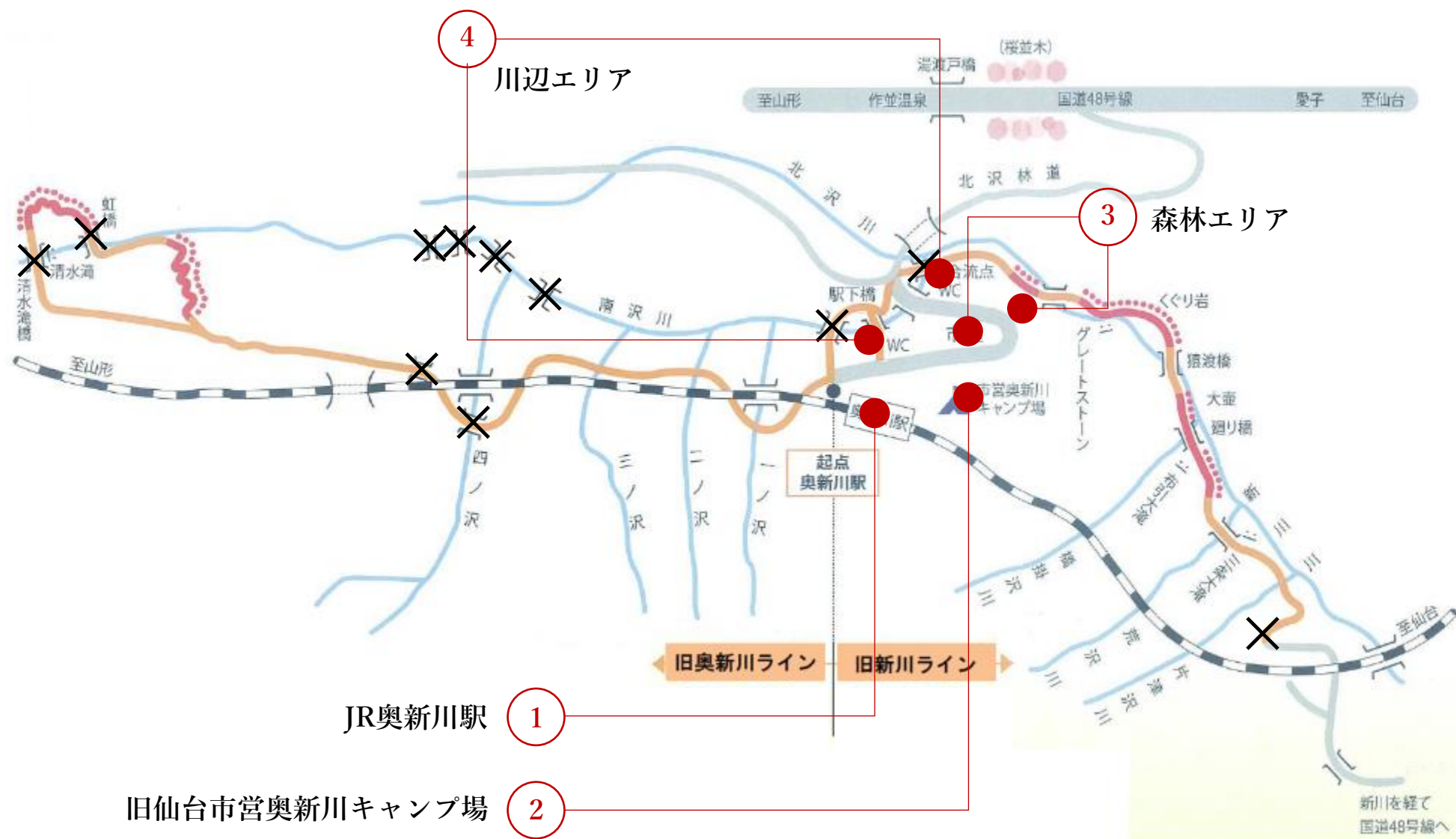


仮説4：ランチ

チェックアウトとチェックインの間である10時-15時に、観光客をどのように楽しませるかはその温泉地でも課題となっている。作並温泉では、現在日帰り温泉を営業しているのは2つの旅館だけであり、近辺エリアの飲食店は極めて少なく、体験コンテンツも充実しているとは言い難い。そこで、作並温泉の旅館やニッカウヰスキー宮城峡蒸溜所と連携し、奥新川の大自然の中でランチタイムに食事を楽しむコンテンツを造成するのはどうだろうか。前述のチェアリングに近いイメージではあるが、温泉旅館が作るテイクアウトメニューを森の中で食べる。或いは、ニッカウヰスキーの本質である清流の中でウイスキーを楽しめる贅沢なお昼休み時間を過ごす。この場合、作並温泉の旅館やニッカウヰスキー宮城峡蒸溜所とのコラボ感をきちんと演出できることが送客の鍵になる。



3. 調查結果：實地調查



3. 調査結果：実地調査

①JR奥新川駅

写真①は写真②の線路側から駅舎を撮影したものである。駅舎内に入ると、無人駅であるが清掃されており、清潔感のある印象だった。写真③④は駅舎内を撮影したものである。③のように、壁面には奥新川旧国鉄時代の写真が展示されており、茶色いベンチが固定されていた。反対側に当たる④にも青いベンチが置かれているが、こちらは移動が可能のようである。写真左側に一定の区画があり、「仮説3：森の図書館（チェアリング）」を実施しようとする際、本棚の設置が唯一可能なスペースである。

<設置可能な本棚の最大サイズ>

横130mm×高さ300mm×奥行80mm

また、写真⑤⑥は線路と反対側の出入り口付近であるが、⑥のように一定のスペースがある。仮説1～4を実施する際、JR奥新川をアクセスの入口とする場合は、このスペースを活用できそうである。但し、このスペースがJR東日本の敷地の場合は、連携・調整が必要である。

<活用イメージ>

テントを張り受付スペースとして利用

備品の受け渡しスペースとして利用



3. 調査結果：実地調査

②旧仙台市営奥新川キャンプ場

写真①②、及び道路を挟んで反対側の③は旧仙台市営奥新川キャンプ場である。奥新川自然振興会が定期的に草刈り作業をしているため、草が伸びきっているということは無かった。また写真②に見えるように仙台市観光課によりベンチも設置されている。

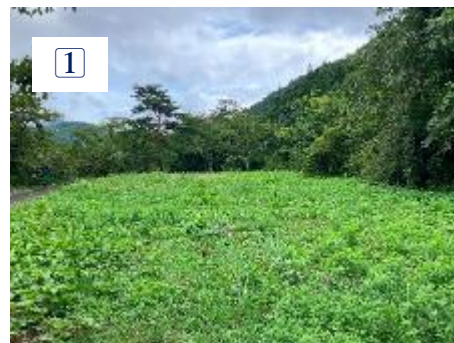
この場所で「仮説1：キャンプ・BBQ」を実施することを考えると、道路に面しており、民家も見えるため、キャンプ場という独立した空間を感じることができない。また、敷地横がすぐ線路なので、仙山線が通るとかなり大きな音を感じてしまう。

その点、写真④⑤⑥の森林エリアは道路から入ってすぐ森の中に入った感覚になり独立した空間を感じることができる。線路からも比較的離れているため騒音も感じない。このエリアは平地が広がっており、細かな草取りが必要になるが活用可能性を感じた。

デイキャンプのような活用であればJR奥新川駅にも近い旧仙台市営奥新川キャンプ場、快適さより非日常を満喫するキャンプ体験を提供するなら森林エリアが適当である。

なお、駅からキャンプ場までの距離がここまで近い場所は他には無いと思うので、電車で手ぶらで来てもらい簡単なデイキャンプを提供するのも良いと考える。

③森林エリア



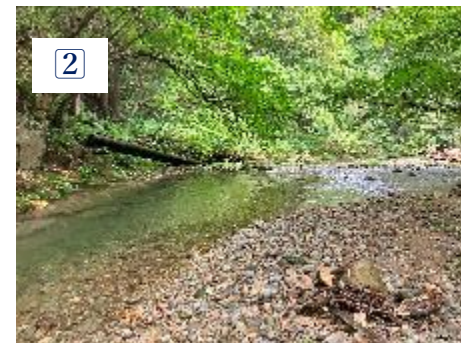
3. 調査結果：実地調査

④川辺エリア

写真①②③は、旧仙台市営奥新川キャンプ場から下りていく南沢川口の写真である。川辺までの歩道はある程度整備されており、歩くのは苦ではない。①は流れがやや早く、リバートレッキングに適していると思われる。一方②は流れが穏やかで、川遊びやチェアリングに適している。③のように川辺に平場があるため、このスペースも休憩や着替える場所として、活用できそうだ。

写真④⑤⑥は、北沢川と南沢川の合流点である。④は南沢川の川上、⑤は北沢川の川上を撮影したもので、やや流れが速い。⑥は合流した後の川下を撮影したもので流れは穏やかである。こちらも④のように平らなスペースがある。

通行止めになっていない範囲で容易に川辺に降りられるのは、この2ポイントである。「仮説3：森の図書館（チェアリング）」を実施するのにちょうど良く、「仮説2：アドベンチャートラベル」でリバートレッキングを実施するのにとも起点にできそうだ。但し、今回は目視での確認にとどまっているため、リバートレッキングのコース整備には実際に川に入っの調査が必要である。



3. 調査結果：実地調査

有識者コメント（株式会社インアウトバウンド仙台・松島 代表取締役 西谷雷佐 氏）

全国を見渡せば、アウトドアショップが運営・プロデュースする「利平茶屋森林公園キャンプ場」（群馬県）やサウナ専門の施設「The Sauna」（長野県）など、森と一体となったアウトドアスポットの先進事例がある。現地を訪れるまでは、旧仙台市営奥新川キャンプ場にハード設備を構築し、食事やサウナなどのコンテンツを充実させるようなイメージを持っていた。しかし、実際に現地を視察すると、旧市営キャンプ場は目の前に道路があり、線路も近く、民家も見え、森の中という雰囲気ではなかった。ファミリーなどを対象としたデイキャンプとしての利用が望ましいのではないかと。一方、森林エリアはまさに奥新川の森を感じられる場所。ここを見て「C.W.ニコル・アフンの森」（長野県）を思い出した。アフンの森では、里山の再生活動を基本に保全・管理することで、自然との共生を目指すとともに、子どもをはじめとする人の心を育む活動を行っている。奥新川の森林エリアも少し人の手を加えることで、アウトドアでの活用と自然保護・自然教育を両立できるのではないかと。

川辺エリアの南沢川口も良い場所だと感じた。川辺までの遊歩道が想像以上に歩きやすく整備されており、下に降りると美しい川はもちろん、川辺のスペースがあるのでリバートレッキングの基地やテントサウナを立てるなど様々な使い方が期待できる。きちんとコース整備をしてリバートレッキングをするのもよし、そこまでいなくても川遊び程度のアクティビティでデイキャンプとセットにするのもよし。

今後、この奥新川エリアでのソフトを考えていくにあたっては、先述のような他地域の先進事例を視察することが有効である。また、自然との共生という観点では、Leave No Trace（LNT）の考え方が参考になる。これは、環境に対するインパクトを最小限にして、アウトドアを楽しむための行動基準を示すもので、受入側の教育として取り入れることもお薦めしたい。地域にプレーヤーが不足している場合は、外部のプレーヤーを常駐させることも考えられる。例えば、ラサントの施設の一角をそのような拠点として活用することも一考に値する。但し、これに関しては林道が整備され、ラサントから奥新川エリアまでのアクセスを改善することが重要である。



株式会社インアウトバウンド仙台・松島 代表取締役 西谷 雷佐 氏

青森県弘前市出身。ミネソタ州立大学卒業後、地元旅行代理店に勤務。2012年、着地型観光に特化した旅行会社「たびすけ」を創業。「短命県体験ツアー青森県がお前をKILL」等、地域の暮らしぶりに注目したユニークなツアーを多数企画実施。2018年、インバウンド事業に特化した「株式会社インアウトバウンド仙台・松島」を創業。2020年からはAdventure Travelに精力的に取り組みAdventure Travel World Summit2021北海道オフィシャルエクスカーション(全国5本)に選出。全国各地にて持続可能な観光地域づくりやサステイナブルアドベンチャーをテーマとした講演を行い、地域資源を活用したツアー造成、ガイド育成、コンサルティング等にも取り組んでいる。

3. 調査結果：ヒアリング調査

概要

日時 9月22日（金）10：00～11：00

会場 湯のまち作並 観光交流館 ラサント（〒989-3431 宮城県仙台市青葉区作並元木2－7）

対象 石垣喜美雄（NPO法人作並・新川地区活性化連絡協議会 会長）、荒井忠男（NPO法人作並・新川地区活性化連絡協議会）
小野寺裕史（作並振興協会・ゆづくしsalon一の坊 ゼネラルマネージャー）

ヒアリング内容

- かつて仙台市営のキャンプ場があり賑わっていたが無くなってしまった。散策路もほとんど通行止めで、道路や橋の修復の予定はない。奥新川エリアは仙台市が手を引いてしまったという印象があった。
- 奥新川エリアに人が増えるのは嬉しい反面、自然が破壊されるのを危惧している。個々人のトレッキング程度なら問題ないと思うが、多くの人が集まった時に、これまで大切にしてきた手つかずの自然が壊されるのは良くない。賑わい創出と自然の保護の両面を考えてほしい。
- JR奥新川駅が無くなるのではないかという不安もある。また、訪れる人が少なくなることによる治安の悪化も不安要素である。
- 奥新川エリアで何か実施する場合、外部の運営団体を誘致しなくても、奥新川自然振興会にお願いするのが良いのではないか。
- 奥新川ラインだけでなく、新川ラインも調査してほしい。
- 温泉旅館としては、一の坊には1日20人程度の連泊客がいるので、そこは奥新川エリアを訴求するターゲットとして狙える。これまでも、連泊客はじめ多くの宿泊客に「朝の散歩ツアー」や「ホテルの鑑賞会」等を実施してきた。温泉旅館と連携した奥新川エリアのコンテンツ造成は大いにあり得る。
- この調査も含め、これを機に、仙台市が奥新川地域を再度考えてくれるのであれば、地域としても協力していきたい。地域だけでなく、JR等の協力も求めていくと良いのではないか。

3. 調査結果：ヒアリング調査

概要

日時 11月9日（木）10：30～11：30

会場 鷹泉閣 岩松旅館1Fロビー（〒989-3431 宮城県仙台市青葉区作並元木16）

対象 岩松厚（作並温泉組合事務局長・株式会社 鷹泉閣 岩松旅館）

ヒアリング内容

- 奥新川エリアを活用できていない現状は、非常にもったいないと感じる。作並温泉として、非常に関心の高い課題である。
- 一番の問題は、遊歩道ではなく、奥新川エリアまでの道路だと考えている。遊歩道や橋を整備しようにも、作業車が入れない。
利用者の立場で考えても、アクセスが電車だけでは降りようと思わないのではないかと。電車でも車でも行けるアクセスを求める。
- キャンプ場も再開すれば利用客はいると思う（温泉旅館の宿泊客は減少してしまうかもしれないが）。但し、森の中なので火が怖い。
例えば、奥新川エリアにおけるデイキャンプ参加者に温泉旅館の共通利用券を差し上げるのは良いかもしれない。但し、日帰り入浴での協力は難しいと考える。日帰り入浴を行っているのは、「岩松旅館」「湯の原ホテル」の2館で、岩松旅館は土日祝日のみ。
- アクティビティに関しては、トレッキングコースに古道を取り入れてみてはどうか（例えば、「ふるさと緑の道」）。こちら、温泉旅館を利用いただく際は、日帰り入浴ではなく宿泊の方が嬉しい。泥がついていたり濡れていると来館が難しい場合もある。過去に当館でスノートレッキングやトレイルランニングの参加者を受け入れた実績があり、その際は別入口から入館いただき休憩場所を有償で提供した。
- 本の図書館（チェアリング）も可能性があると思った。岩松旅館や関山街道フォーラム協議会の所有する本を提供することも吝かではない。
- ランチのテイクアウト提供については、岩松旅館では人員を割けそうにない。湯の原ホテルの新しいカフェなどは良いかもしれない。
- 作並・新川地域だけでなく、定義地域との連携も図るべき。
- 奥新川エリアの運営人員として地域おこし協力隊を募れないか。そのような人材は地域の強力なマンパワーになる。募集するにあたって、この地域でアクティビティを実施することが、地域おこし協力隊等外部プレーヤーの呼び水になるかもしれない。

3. 調査結果：ヒアリング調査

概要

日時 11月24日（金）10：30～11：30

会場 ニッカウキスキー宮城峡蒸溜所会議室（〒989-3433 宮城県仙台市青葉区ニッカ1番地）

対象 仁野雅之（ニッカディスティラリーサービス株式会社 常務取締役 仙台支店長）

ヒアリング内容

- ニッカウキスキー宮城峡蒸溜所の第一のミッションは観光業ではなく企業のPR。工場に足を運んでいただき商品の魅力を訴求することにある。一方で、地域にお世話になっているので、CSRの一環として恩返しをしたいという気持ちを持っている。
- 地域みなさんと様々な事業連携を行ってきたが、奥新川・新川及び周辺のエリアが持続可能な賑わいを創り、その事業が根付いていくためには、自治体に頼りすぎずに、自走化を見据えて、事業者自らで賑わいを生み出し育てていくことが大切と感じている。なお、奥新川エリアでは、ハード面の課題が大きいと思う。
- 奥新川をはじめ、作並・新川地域を考えた時に、競合が多く差別化が必要。時間をかけてじっくりとやるべき（弱みを強みに変えていくべき）。その中でも強いコンテンツは温泉旅館だと思う。団体客から個人客にシフトして、各旅館の状況は悪くない。
- ニッカウキスキー宮城峡蒸溜所内の取組としては、設備改修をし、見学のレベルを上げ、セミナーも充実させている。シャトルバスの運行本数も増やした。現状年間約16万7千人の来場があるが、来場者数を増やそうとは考えておらず、むしろ団体客を減らし、お客様一人ひとりの満足度を上げていきたいと考えている。
- 地域全体を見渡すと、飲食店が少なすぎる。鳳鳴四十八滝や桜並木の活用がもったいない。インバウンドは台湾の方が増えている。
- ふるさと緑の道は、宮城県の整備が進めば相互連携も考えられる。

3. 調査結果：ヒアリング調査

概要

日時 12月4日（月）13：00～14：30

会場 奥新川自然振興会事務局（〒981-0931 宮城県仙台市青葉区北山1-8-25）

対象 内嶋秀司（奥新川自然振興会 会長）、小野一男（奥新川自然振興会 副会長）

ヒアリング内容

- 奥新川自然振興会は、廃屋の解体の仕事を皮切りに、川原に続く歩道等の遊歩道の整備や旧キャンプ場等の草刈りを行ってきた。
- 仙台森林管理署から「遊々の森」（森林環境教育推進を目的とした森林教室、体験活動等へのフィールド提供）を0.7haを借り、子どもを対象に「樺の巨木体験ツアー」「キノコツアー」「川原遊び」等のイベントを実施してきた（1回あたり10～20人の参加者）。
一番の想いは、「子どもたちに奥新川の自然の大切さを伝えていきたい」ということ。一方で、広報PR不足を感じている。
- 奥新川エリアで最も不便を感じているのが水。安全な水が無ければ人は住めないし、この地域で何かやるにも水問題が解決しなければ話は進まない。キャンプ・BBQ等イベントをやる際は浄化水槽を用意して短期的にも設置してみるのはいかがでしょうか。トイレは絶対に必要。
- 作並・新川地域を含めた活性化を図るためには、高齢な地域住民だけでは難しい。もっと若い人を巻き込んでいかないといけないと思う。
奥新川地域では、「旧キャンプ場の活用」「借りている山の活用」「川の活用」が3本柱。奥新川の自然の恵みが伝わる「県内三番目の大きさの樺の木」「立石」「珪化木」も活用したい。アクティビティをやる上では、インストラクター等外部の人が入ってくるのも歓迎。
- JR奥新川駅下の吊り橋を直し、合流点まで行けるよう整備してほしい。道路や遊歩道は国・県・市と管轄が跨り、行政間の連携を望む。
- 県立二口自然公園内の地域であるので、民家や市の施設など景観を損ねない色合いとするなどの配慮が必要だと思う。豊かな自然の保護の観点を持ち、多くの人が訪れる場所になると良い。訪れる人が少なくなることで治安が悪化し、結果的に自然が損なわれることが不安だ。
- 奥新川の一部がインバウンド用のパンフレットに載っていて驚いた。外国の方に対しても恥じない地域にしていきたい。
- 活用アイディアとして、「炭焼き小屋」「ロープで巨大迷路」「竪穴式住居の造作（地域で縄文時代の遺物が出土したため）」「釣り・陶芸・ツル編みなど趣味の会」「駒新道、小山田新道等江戸時代由来の古道の利用」。

3. 調査結果：ヒアリング調査

小括（実地・ヒアリング調査）

奥新川・新川エリアの豊かな自然を尊重したい地域の方々の気持ちは共通している。地域の賑わい創出を図る一方で、自然の保護を考慮する必要がある。奥新川エリアでアクティビティの取組を実施していく際は、実績のある奥新川自然振興会との連携を図るのが良いと考える。但し、アクティビティの種類によっては、専門性の高い人員が必要になることが想定される。地域内外のプレーヤーが協働していく体制を整えられれば、地域活性に資する活動の幅が広がる。

「仮説1：キャンプ・BBQ」は、火の取り扱いに対する不安があり、実施するには管理する人員が必要。キャンプによる宿泊についても運営面の不安があり、また作並温泉との兼ね合いを考えるとデイキャンプの方が地域内連携を保ちながら実施できそうである。「仮説2：アドベンチャートラベル」は、自然の大切さを伝えるというコンセプトがポイント。単なる遊びではなく、学び要素があることで、地域の方々の気持ちを汲み取りつつ、参加者の地域への愛着も育めるのではないか。これは自然の保護にもつながる。また、リバートレッキングは専門のインストラクターを招聘する必要がある。「仮説3：森の図書館（チェアリング）」は、温泉旅館の所有する本の寄贈などの連携可能性も見えた。「仮説4：ランチ」は、温泉旅館との連携が望ましいが岩松旅館は難しいとのことだった。奥新川の取り組みに前向きに協力いただけそうな一の坊や、今回ヒアリングできなかった湯の原ホテル（新しくカフェを併設）等にも具体的に相談し、可能性を探っていきたい。また、奥新川の清流とニッカウキスキーの親和性は極めて高いため、ニッカウキスキーの商品PRに資する形での実施方法を模索したい。

今回のヒアリング調査を踏まえ、奥新川・新川エリアに対する意識は各人温度差があると感じた。地域内の連携、地域外との連携を築くためには一定の時間がかかる。まずは活用可能性のある事業を地域内外のプレーヤーを巻き込みながら実証し、課題と成果を得ることが重要である。

事業可能性1：地元野菜BBQを楽しむ手ぶらでデイキャンプ

事業可能性2：トレッキング&リバートレッキング

事業可能性3：チェアリング（森の図書館・温泉旅館のテイクアウトランチ・川辺でニッカウキスキー）

4. コンテンツの可能性

事業可能性1：地元野菜BBQを楽しむ手ぶらでデイキャンプ

ファミリーが、仙山線で来て、手ぶらで楽しめるデイキャンプ。

※令和4年度に新川分校でキャンプの実証実験を実施したところ、ファミリーキャンプのニーズが非常に高かったことから設定。

POINT 1 新川分校で保管しているキャンプ用品を有効活用

あまり使用されていない状態の良いキャンプ用品を地域からレンタル。

POINT 2 仙山線で訪れ、気軽に楽しめる手ぶらキャンプ

駅から歩いてすぐ、という稀有な立地を活用。参加ハードルが低い。

POINT 3 地域で作られた野菜を食べ、川遊びも楽しめる

新川分校実証実験で好評だった野菜の提供。アクティビティもプラス。

運営スタッフとして「奥新川自然振興会」、キャンプ用品のレンタルで「作並・新川地区活性化連絡協議会」、仙山線での来訪を前提とし、集客プロモーション等について「JR東日本」と連携を図りたい。



■想定スケジュール

<JR奥新川駅到着> 仙台方面から11:03 山形方面から11:39

11:00~12:00	受付（貸出用品の説明・食材のお渡し）
-------------	--------------------

受付後～	BBQ
------	-----

13:00~15:00	川遊び解放
-------------	-------

<JR奥新川駅出発> 仙台方面へ15:47 山形方面へ15:28

■想定予算（参加者を4人家族7組とした場合）※税込

項目	単価	数量	金額
運営スタッフ人件費※1日	17,200円	4名	68,800円
BBQ食材（肉など）	3,000円	7組	21,000円
BBQ食材（地元野菜）	1,000円	7組	7,000円
BBQコンロ（レンタル）	500円	7基	3,500円
タープ（レンタル）	800円	7基	5,600円
テーブル（レンタル）	200円	7基	1,400円
折り畳みチェア（レンタル）	100円	28基	2,800円
傷害共済保険（非課税）	245円	32名	7,840円
諸経費（消耗品購入等）	5,260円	1式	5,260円
合計		1式	123,200円

収支が0になる参加費：大人 5,500円（税込）、こども 3,300円（税込）

4. コンテンツの可能性

事業可能性2：トレッキング&リバートレッキング

子どもから大人まで楽しめるアクティビティ。トレッキングは、通行止めの箇所もあるためガイドを付けながら安全に実施。リバートレッキングはコースを整備した上で、インストラクターのアテンドのもとヘルメットとライフジャケットを着用して実施。

POINT 1 インバウンドも狙えるアドベンチャートラベル

国内はもとより、訪日客も見据えたアクティビティメニューを設計。

POINT 2 川を活用した地域初の取組にチャレンジ

地域固有の川の魅力を体感できるアドベンチャートラベルを造成する。

POINT 3 遊ぶだけではない、自然との共生を学ぶプログラム

奥新川の活用の前提である「自然の保護」を重視したアクティビティ。

トレッキングのコース設計と運営は奥新川の自然を良く知る「奥新川自然振興会」、リバートレッキングのコース設計と運営は外部のインストラクターを受け入れ、実施したい。



■想定スケジュール

<JR奥新川駅到着> 仙台方面から09：07 山形方面から09：44

09：00～10：00 受付（オープニングガイダンス）

10：00～12：00 トレッキング

12：00～13：00 休憩

13：00～15：00 リバートレッキング

<JR奥新川駅出発> 仙台方面へ15：47 山形方面へ15：28

■想定予算（参加者を10名とした場合）※税込

項目	単価	数量	金額
運営スタッフ人件費※半日	8,600円	2名	17,200円
リバートレッキング パッケージ料金 ※インストラクター人件費含	11,000円	10名	110,000円
インストラクター交通費	10,000円	1式	10,000円
傷害共済保険（非課税）	245円	12名	2,940円
諸経費（消耗品購入等）	9,860円	1式	9,860円
合計		1式	150,000円

収支が0になる参加費：一律 15,000円（税込）

※但し、上記金額の他、リバートレッキングコース設計のための調査費として330,000円（税込）がかかる見込み。

4. コンテンツの可能性

事業可能性3：チェアリング（森の図書館・温泉旅館のテイクアウトランチ・川辺でニッカウキスキー）

日頃の喧騒から離れ癒しを求める大人たちが、奥新川エリアで好きな場所を見つけてチェアリング。ご提供するの、本とランチとニッカウキスキー。

POINT 1 静かな森林、川のせせらぎを聞きながら読書

JR奥新川駅に本棚を設置。奥新川全体を森の図書館に演出する。

POINT 2 温泉旅館の特別なランチを楽しむ

温泉旅館のチェックアウトからチェックインまでの時間を有効活用。

POINT 3 川の清流を間近に、ニッカウキスキーを味わう

ニッカウキスキーの美味しさのヒミツである地域の水の魅力に触れる。

JR奥新川駅に本棚を設置することは、JR東日本との協議が必須。温泉旅館のテイクアウトランチ提供は、「一の坊」「湯の原ホテル」または「アルベロカフェ」に相談。ニッカウキスキーの提供は、商品のPRにも資するような連携を図る。



■想定スケジュール

<JR奥新川駅到着>仙台方面から11:03 山形方面から11:39

11:00~12:00 受付（椅子のお渡し、本の選定）

12:00~15:00 チェアリング

<JR奥新川駅出発>仙台方面へ15:47 山形方面へ15:28

■想定予算（参加者を10名とした場合）※税込

項目	単価	数量	金額
運営スタッフ人件費※6時間	12,900円	3名	38,700円
折り畳みチェア（レンタル）	100円	10基	1,000円
ランチ・ウイスキー	3,000円	10名	30,000円
傷害共済保険（非課税）	245円	14名	3,430円
諸経費（消耗品購入等）	3,870円	1式	3,870円
合計		1式	77,000円

収支が0になる参加費：一律 7,700円（税込）

※但し、上記金額の他、JR奥新川駅に本棚を設置するための設置費として別途費用がかかる見込み。

5. 総括・体制の可能性

遊歩道や林道の整備等ハードの課題はあるものの、現状の奥新川エリアの活用として様々なソフト開発の可能性を示した。「仮説1：キャンプ・BBQ」は、火の扱いを伴うコンテンツの運営面を考慮し、JR奥新川駅に隣接する好立地を強みにした「地元野菜BBQを楽しむ手ぶらでデイキャンプ」を提案する。「仮説2：アドベンチャートラベル」は、自然を守ることにも配慮し自然の大切さを伝えていきたい、というヒアリング調査を踏まえ、遊びだけではない学ぶアクティビティとして「トレッキング&リバートレッキング」が良いのではないかと考える。「仮説3：森の図書館（チェアリング）」「仮説4：ランチ」は、親和性の高いコンテンツであるため、「チェアリング（森の図書館・温泉旅館のテイクアウトランチ・川辺でニッカウキスキー）」という形でまとめた。食事やウイスキーの提供には、温泉旅館とニッカウキスキー宮城峡蒸溜所との調整が不可欠であるが、作並・新川地域の二大観光資源との連携は是非実現したい。また、いずれの事業可能性も仙山線による来訪を想定している。JR東日本との連携により、コンテンツの魅力化、及び集客プロモーションの強化を図りたい。

今回の調査を終え、地域内連携の難しさを感じるとともに、奥新川自然振興会が現在も奥新川地域の活性化に尽力している事実を知ることができた。今後の事業可能性の実証においては、奥新川自然振興会が主体的な役割を担い、各団体や住民が無理のない継続性のある形で連携していく体制が現実的だと感じる。また、外部のプレイヤーの積極的な受け入れも継続性ある事業展開には欠かせない。地域の方々は、シビックプライドが高いことは間違いないが、高齢化が進みマンパワーやアイディア創出に課題があることも事実である。若い力や新規事業者を受け入れる地域のスタンスを醸成し、地域内外が連携できる環境を整えることで、サステナブルな地域活性を実現することができる。今回見出した事業可能性をもとに、実験的な実証を経て、コンテンツ造成と運営が自走化することを期待する。



6. 次年度以降のビジョン

■実証実験

事業可能性の1～3の収支面や運営面の課題をクリアし、有識者のアドバイスも取り入れながらコンテンツ化し、まずは単発のイベントとして実施するのが良いと考える。モニター参加者を招聘し、実際に体験した感想をヒアリングするとともに、運営側の地域のプレーヤー（または外部のプレーヤー）の意見も収集する。「継続的な運営は可能か」「集客力はあるのか」「自然との共生ができるか」といったことを評価するために、まずは実施してみることが重要である。

■奥新川の自然との共生を実現するための学習

Leave No Trace（リーブノートレイス）というものがある。これは、環境に与えるインパクトを最小限にして、アウトドアを楽しむための環境倫理プログラムのこと。事業可能性として示した3つの活用方法を含め、奥新川エリアに人が入ること自体が自然に影響を与えるものである。このことを前提に、自然と上手に付き合いながら楽しむ方法を学び、伝えていかなければならない。これは、奥新川の自然を大切にしたいという地域住民の方々の想いに応えることにもなる。実証実験だけでなく、運営側（或いは地域の方々も含めて）がLeave No Traceを学ぶことは、中長期的な奥新川エリアの活用に資すると考える。

■先進事例の視察

BBQ&デイキャンプ、トレッキング&リバートレッキング、チェアリング、これらはどれも全国で既に楽しまれているコンテンツであり、特にこれらを活用し集客や地域活性に成功している地域・スポットが存在する。そのような場所に足を運び、視察をすることで、成功のメカニズムを知り、奥新川エリアでも活用したい。



次年度は「本調査を踏まえ効果的なコンテンツを造成すること」「受け入れ側の自然との共生に関するリテラシーを向上させること」「実際にコンテンツを実施し、事業可能性を評価すること」この3つを柱に事業を推進することを提言する。